

# 山形『ハッピー枝豆』の ゆきね ラインナップに『雪音』を導入して

さがえ西村山農業協同組合  
営農販売部販売課  
考査役 柏倉 浩良

## 地域及び農協概要

さがえ西村山農業協同組合は山形県のほぼ中央に位置し、東北部は平坦地帯であり西南部から西北部は朝日連峰、月山、葉山等の出羽丘陵に囲まれた山間、中山間地帯を形成しております。これら西部の丘陵、山岳地帯を源とする寒河江川、朝日川、月布川と最上川が地域内を貫流しており飲料水や農業灌漑用水に利用されております。また気象は地域差が大きく、山間、中山間地帯では全国有数の豪雨豪雪地帯であり、夏は高温多雨、冬は寒冷と気温差も大きく、特に夏場の日較差によってさくらんぼ、ぶどう、西洋梨、りんご等の果実は糖度が高く、実のしまりも良いものが生産されております。

当農協の販売額は93億円（米穀25億円、園芸54億円、畜産14億円）で果樹栽培が主体となっております。なお園芸の内訳は、主力のさくらんぼをはじめ果樹が40億円、野菜が8億円、花卉が6億円です。

## 枝豆栽培の取り組み

枝豆栽培に取り組んだきっかけは、平成4年頃からの水田転作の一環として大豆栽培面積が拡大し、大豆で収穫するよりも枝豆で収穫をした方が単価的に良かったことと、当時、枝豆の需要が高く、枝付き出荷から袋詰めのもぎ出荷へと移行する時期でもありスムーズに導入することが出来ました。

## エダマメ栽培における注意点

枝豆栽培で注意していることは第一に食味を均一化させることで、良食味の枝豆を作るため、統一施肥基準を設け、米ぬかや鶏ふん等の有機質肥料の投入により土づくりを徹底させました。第二に鮮度保持を行うためにMA包装資材の導入と予冷出荷、冷蔵輸送体系の確立を行いました。第三にブランド確立のため格付けを行い、生産管理の徹底を図りました。



写真2 JAさがえ西村山 枝豆栽培圃場



写真1 筆者写真



写真3 4 雪音の圃場における状況と株

## 雪音の導入に当たって

「雪音」を導入したきっかけは、もともと当農協は9月の後半から出荷する品種H（S社）があり産地化されてきましたが、収穫作業の集中による穫り遅れに伴う品質低下が懸念されたことと、少しでも出荷時期を延ばして欲しいとの各市場からの要請があり、枝豆の品種構成を完結するため、9月上旬から9月下旬まで出荷できる品種を毎年試作してきました。

平成17年、山形県農業総合研究センターで行われた9月穫り枝豆品種試験で「雪音」が1等特別賞となり、試作結果でも茨つきが良好で収量性が高く、食味、品質も良好だったことから導入に踏み切りました。しかし枝豆栽培において最近の良食味系品種は収穫時期が短く、収穫が遅れると茨色が退色し、品質が低下することがあるため、生産者へは品種特性を十分理解頂くために座談会などを開催し周知徹底を図りました。そして昨年（平成19年）の試作で各市場の評価を得て、今年（平成20年）より本格的な販売が始まりました。



写真5 共選出荷をしている  
寒河江営農センター選果場

## さいごに

もともと山形県は鶴岡のただぢゃ豆が有名で、茶豆生産地帯ではありますが、最近では8月に全国各地から茶豆が市場へ出荷されるようになり、豊作年などは相場が大暴落してしまうことがありました。今年も山形県の出荷時期は大変出荷量が多く、販売単価が例年より

も低い傾向にありました。当農協としては、産地の差別化を図ることも含め、旧盆明け以降から収穫できる白毛の枝豆に期待しております。品種構成を安定化させるためにも、食味、品質、収量、耐病性、栽培しやすいなどをポイントにおいた品種を導入していきたいと考えております。



写真6 パッキングし箱詰めする様子



写真7・8 出荷荷姿及び出荷専用箱

